

怒りは、自分が大事に思うものが損われたときのサイン／  
それを、どう、伝えるか。。

難波 純 看護師匠

初めての講談入り講座体験でした、ありがとうございます。

怒りの芸、講談。怒りから私がまず思い浮かぶのはパワーです。私にとって怒りは自分が大事に思うものが損われたサインで、自分が何を大事に思っているのかに気づかせてくれるもの、そのことを考えたり表現したり人に伝えてみようと思ったりする力を与えてくれるものです。

怒りだけではない講談、そのリズム。

興味、関心のない人にも、まず触れてもらいたいと思うとき、伝える内容やその理解は相手のものと思うとき、雰囲気の要素は大きいのだと実感しました。頭も体も楽しいと受け入れ、口が開くように思います。

いつもはWeb視聴なのですけれど、今回はどうしても赤坂に行きたいと思っておりました。

30年前、1993年2月から8月にかけてお世話になっていたからです。さらにパワーアップされたパワフルな加納婦長との再会に嬉しくなりました。修士論文「リエゾン精神看護の効果に関する研究」に取り組むにあたって大変助けていただきました。

大学院に入ってみると教授が病気で不在、当初の予定とは違った形、テーマで研究を進めることとなり、学内の先生達はもとより他大学の先生、院に入る前の職場の先輩達にも教えを請い、右往左往しながらの不安な日々でした。研究の場として一面識もない私を受け入れてくださり当時から感謝しておりました。患者でもなく職員でもない後進の私に様々に問いかけて、自分で考え自分の言葉で語る機会を与えてくださり、今も心に持ち続けている問いもいただきました。

『それぞれの誇り 婦長は病棟の演出家』が出版されるまでのエピソードも心に残るものでした。ゆきさんの言われるレポートの「ごりやく」にも重なり、自分の中にあるもの、生まれたものを形にして出していくこと積み重なっていくことを考えていました。今回いつもサボってばかりいるレポートになんとか取り組めたのも「塩梅パワー」のおかげです。

病棟でのエピソードや患者さんとの関わりのお話にうかがえる看護の創造性、

面白みには「そう、そう」と思っていました。現場にはそのようなエピソードが溢れていて、気づかれないうちまでいることもあるだろうと思ったり、様々な工夫や取り組みが次々生まれてくる生き生きした場の魅力に思いを馳せたり、自分がいる場をもっとそのような場にしていきたいと思う時間でもありました。

この週末、6人でのオープンダイアログ研修があります。オープンダイアログとの重なりもいろいろ感じていました。「クライアントのことについて、スタッフだけで話すのをやめる」オープンダイアログ発祥の地であるケロブダス病院でこの取り決めをした日から、何もかもが変わったと言われていました。ひとくくりで考えない、多様性、創造していくこと、豊かさ、いくつもの言葉が重なっていく感覚がありました。

「講談看護師加納塩梅テンカン小噺チャンネル」を、この週末に会う5人にもちろん紹介してこようと思っています。

30年前からの思いも込めて、加納婦長ありがとうございます。  
そして、塩梅様、これからもよろしく願いしまそして、これからもよろしく  
お願いしたいです。